

しずおか新聞感想文コンクール

「2024年度しずおか新聞感想文コンクール」(静岡新聞社・静岡放送主催、県教委、県私学協会など後援、静新会協力)の審査結果が発表された。応募総数は4261点。小学生、中学生、高校生の3部門で審査は行われ、最優秀賞にはそれぞれ、熱海市立第二小5年・井上沙英さんの「制服は選べたほうがいい」、静岡大付属静岡中1年・小曽根杏樹さんの「平和のためにすべきこと〜声なき声に耳を傾ける〜」、常葉大橋高1年・野呂優希さんの「子供達の笑顔を守るために〜夢への決意〜」が選ばれた。学校賞(団体賞)は応募作品数などを総合的に選考し、小学生の部から1校、中学生の部から4校、高校生の部から1校が決定した。

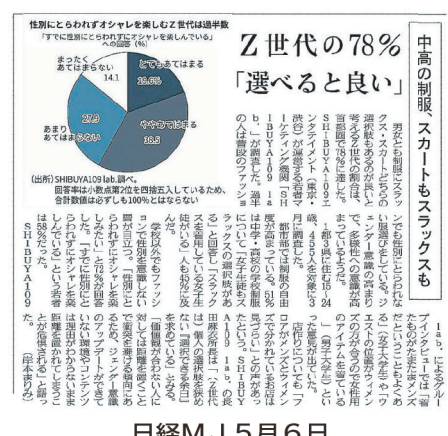
最優秀賞

制服は選べたほうがいい

いのうえ さえ
井上 沙英さん
熱海第二小5年

様々なことが豊かになっていく社会で、制服が選べたらよいという新聞記事に私は共感した。日々の生活の中では男の子、女の子と区別されがちであるが、「女の子らしさ」とは何だろう

それでも、時代は変化していることを私は改めて多くの人に知ってもらいたいと思う。新聞記事にある通り、すでに都市部では制服の自由度が高まっている。実際にスラックスを着用している女子生徒がいると聞く、私はうれしい。また、小学生は外で活動することも多く、スポンの方が動きやすいのではないだろうか。そこで私は、クラスでもアンケートを取ることにした。「制服のスボンとスカートは選べる」といいか」と



平和のためにすべきこと〜声なき声に耳を傾ける〜

おぞね あんじゅ
小曽根 杏樹さん
静岡大付属静岡中1年

「七十九年前の戦争で亡くなった人たちの遺骨が今も大切な家族のもとに帰っていない。しかも、遺骨が含まれている土砂が新しい基地をつくるための埋め立てに使われる可能性がある。」「この記事を読んだ私は、大きなショックを受けた。

いって知ることの出来る、ひめゆり平和祈念資料館を訪れた。沖縄戦は、私が想像していたよりもはるかに恐ろしくすさまじいものだった。資料館の中には、亡くなった生徒一人ひとりの生い立ちや当時の様子を記している展示があり、特に印象に残った。穏やかな顔写真、人柄や夢、そして目に飛びこんできた「即死」や「自決」という言葉。私と同世代の人たちの夢や幸せが戦争によって踏みつけられたことに、胸が締めつけられた。あらためて戦争というものに悲しみと憎しみを感じた。



静岡新聞 1月11日



高橋 健二 県立中央図書館長

17回目を迎えた本コンクールに、今年は合計4261点の応募をいただきました。部門別の構成比は、小学校11・1%、中学校37・2%、高校51・7%で、今回はさらに多くの小中学生にも参加していただけることを期待しています。記事の題材については、能登半島地震等を教訓とした防災体制、生成人工知能(AI)の活用、地域紛争および世界平和、食品ロス等の環境問題を選んだ作品が目立ちました。その中でも審査会で高く評価され、各部門で最優秀賞となった三つの作品を紹介します。

審査員長講評

審査員

県立中央図書館長 高橋 健二(審査員長)
県教育委員会教育長 池上 重弘
常葉大学副学長 安藤 雅之
静岡大学教育学部教授 坂口 京子
静新会会長 内浦 正夫
静岡新聞社編集局長 石川 善太郎
静岡新聞社読者プロモーション局長 村上 智人

最優秀賞

- ▽小学生の部 静新会会長賞
井上沙英(熱海第二小5)
- ▽中学生の部 静岡新聞社賞
小曽根杏樹(静岡大付属静岡中1)
- ▽高校生の部 静岡県教育長賞
野呂優希(常葉大橋高1)

優秀賞

- ▽小学生の部
木下晴登(静岡清水興津小6)
- ▽中学生の部
西尾翠(静岡東中1)
- ▽高校生の部
磯部葵衣(掛川西中2)
- ▽中学生の部
洞桃香(静岡雙葉高1)
- ▽高校生の部
大沢美鈴(浜松聖星高2)

入選

- ▽小学生の部
竹原創介(熱海第一小5)
- 田崎奈穂(東海大静岡翔洋小6)
- 山下乃々華(東海大静岡翔洋小5)
- ▽中学生の部
河西智(富士元吉原中3)
- 石田みなみ(湖西鷺津中3)
- ▽高校生の部
小林さわ(富士高1)
- 大石侑奈(常葉大常葉高2)
- 植田真琴(浜松市立高1)
- 深沢優来(富士高2)
- 増田咲愛(掛川東高3)

子供達の笑顔を守るために〜夢への決意〜

のろ ゆうき
野呂 優希さん
常葉大橋高1年

「千奈ちゃんはお父さんお母さんを幸せにするために生まれてきた。」「二〇二二年におきたバス置き去りの事件で当時の園長に実刑がでたという記事を読んだ私は、この裁判長の言葉にはとっとした。将来幼稚園教諭になりたいと考えていた私には到底忘れることのできない辛いニュースだった。これまでも同じような事件はあったが、静岡

を把握し声掛けをし、食べさせていた先生に、ただただ感嘆した。私は妹がいるので小さな子の面倒をみるのは少しばかり得意だと思っていたが大きな間違だった。はたして本当にこの大きな責任のある仕事を私ができるだろうか、と不安が残ったのも事実だった。そんな時にこの事件がおき私の不安はより強いものになった。



「前向きに」父受け止め

裁判長 声詰まらせ

千奈ちゃんはお父さんお母さんを幸せにするために生まれてきた。私自身も過保護すぎる親を幸せにするために生まれてきたのだと感じている。裁判長の言うように、事件の教訓になるために生まれてきたのではないと思う。けれど私は決して千奈ちゃん達のことを忘れたい心に決めている。大切な命を預かる

静岡新聞 7月5日

豊かな感性、強い意志 社会読み解く

幼稚園教諭を目指す高校生の野呂優希さんは、送迎バス内で園児が死亡した事件の記事を読み大きなショックを受けました。また、職場体験の経験から保育という仕事の責任の大きさを実感し、不安な気持ちになりました。しかし、裁判長の言葉も踏まえ、子供の成長を間近で見守る大切さを再認識し、保育の仕事を目指す決意を新たにしています。記事から問題点を把握するだけでなく、保育という仕事のやりがいにも目を向ける現実把握力の高き意志の強さがにじみ出る素晴らしい作品でした。

交流サイト(SNS)等で真偽不明の情報が常に飛び交い、しかも複雑で先行き不透明な現代社会において、入念な取材に基づき、多くの人のチェックが入った新聞記事は、簡潔で信頼できる良質な情報源です。日頃から新聞に目を通して記事に込められたメッセージを読み取り、社会への関心を深め、行動の変容に繋つなげていく。この過程はまさに成長の本質であり、感想文の作成で磨かれる読解・思考・表現のスキルは、日常生活や進路選択等のさまざまな場面で必ず役立つと確信しています。